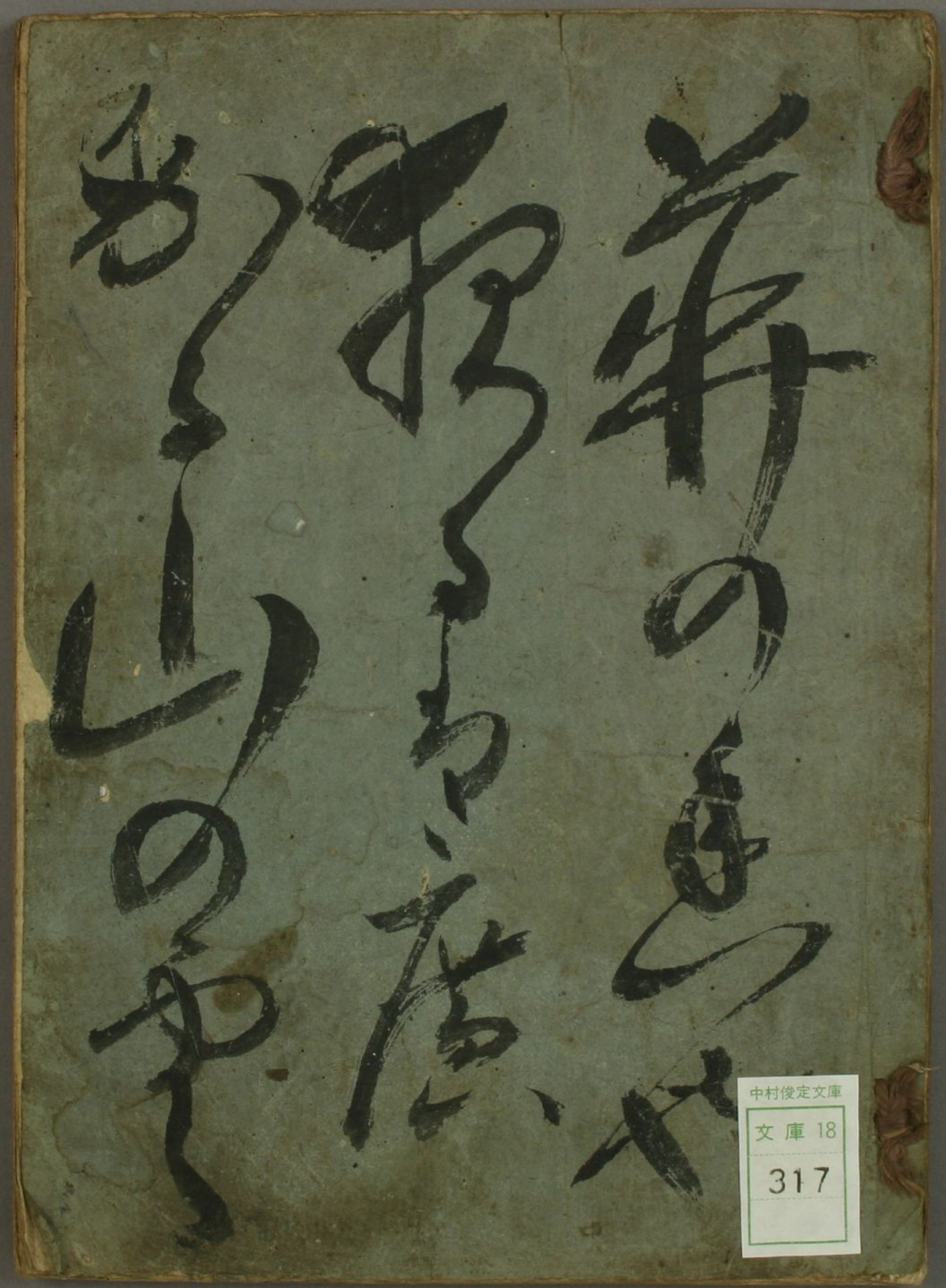
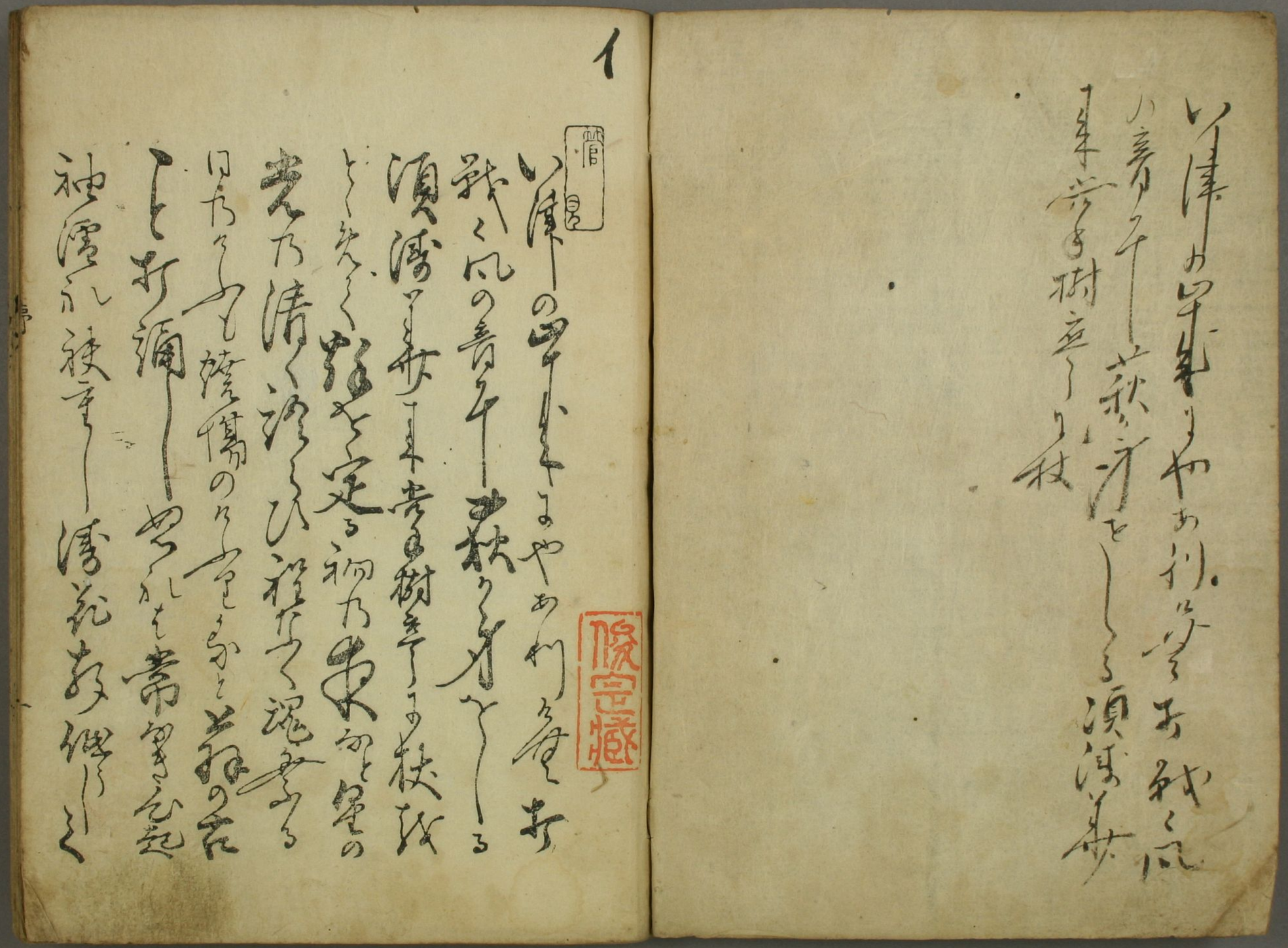

中村俊定文庫
文庫 18
317



俊定藏

いとまれなきより芭蕉に遊ひ懐
を開き多し されハ此人今死去とも遊芸乃
年来編めやん則人もあらハさしむとすれは
小冊を綴維経と号て冬を糸蘇の
鷲をとは ん細くとも糸為し
縁く師を眺河の辛にまかせ序
みつからとハ赧恨ハ鉢とも変
より四十年穆王幸来の冬

十七日新しくれの室にかくれし
今ひ知嗚呼所人ミ風雅乃一旗として
蕉翁の嗣高しまう惜ありき蕉の
雅として其信をよう一三冊の志あるも
彼らを經の如く小田乃修の嗚續
さは夕昔をんとして記しるし為叙
此集は春の季の句に至し
新虫庵の荷葉句前句付と記しひ

[illegible]

[illegible]

宝暦二歳壬申 [illegible]

凡例

一追善追悼懐旧句ゝ混雑坐列到来の
逐速ゝ[illegible]

一句者紅白庵門人而已小[illegible]半時庵門下
其外他門自ゝ[illegible]加[illegible]

一國哉断[illegible]八[illegible]美作ゝ人[illegible]

一濤花子八津山妙願寺一代号曉了院順瑩
誹系八尾陽露川門而樗羅又菊雨[illegible]

後ヲ清花ト改称ニ紅白庵甚愛芍藥

因序ニ其謂あるを

逝悼寄仙

京都府立図書館

中村俊定文庫

常平樹亭

姑蘇乃契哉青ヲ仙あること式　青千

青ハ時雨　十七日ノ　日　駕鵬

賦して又乃ふ帆ふ獨や漕ぎ入　花馨

業乃戸にて　乳の窓年　崔市

年箱中料理を書き　春車

元ゑを形を　元ふ乃　れ　東寫

ウ　ゆの翁ゑ合ひし　百合の香　薫羽

詩の匠を書よ　絶し治拾　椰鵬

さらくといふ音 ちらほら春の篠 萱風

除夜の音 軽舟の夢 富青

初春乃相模くよりの法城の寺 駕鵬

言葉数ふうち燈よ消ぬ炭 花馨

やけてあぶる金色の数さらを 青千

後乃雛てうう憂を蓋く 駕鵬

出ぬ月よ思流を山乃秋 花馨

出ぬく神ま珠数て拝ん 青千

何くの郷も春の美 駕鵬

累数数し梅干ッ咽 花馨

二

二軒家絶ゝく新れ家春の凡 青千

富士ゝ仲用冨美湾 駕鵬

唐ゝ形き番や昭乃神書燈 花馨

職ゝ侍犬の鼻ゝ白彩 青千

南無阿弥陀仏とサいつり去葉風 駕鵬

椿乃ゝ春あ井夕立 花馨

静めく淀の屋形船　冨青

姫の胡蝶と紅葉刺　仝

搖ぬまに月の屋　青千

高の小菊やりすぎ　仝

冠と袴色こゆる　鴛鴦

描き寄る色こく筆　仝

ウ

夏更ぬ　鶴　冨青

うしろ姿の文艸　花馨

四阿の雲に滴雲霧さん　青千

武の雲と別って弱くと鞍　仝

白雲へ高ハ久米北の海　花馨

田うう性の高く成る　執筆

追善追悼懐旧混雑

霧の湾 春ハ凡遠し 藻語堂 市瀬 一楚

春半ノ路を作もちらす哉 福田 如酔

雲うくまい落ちう佐の鐘ノ 仝 覧水

花の堂や十王遠ノ合ル 仝

今と昔ノ嶺霧ノ 木知原 素考

降ノ夕や西へ〳〵ねの音し 倉鋪 稲翠

ちる跡の松いとうし 備中中津井 静我

菊や明日 放楽〳〵 仝

ちるや菊 埋ノ末て明もむ乃鳥 仝 一桐

流さるを惜しい京癖元塚の梅 仝 竹丐

咲きて昭うくもて塚ノんめ 仝 左栉

短冊ノ 風掛ノや塚のんも 仝 如連

見へとる忠 風鐘や 同国津〻村 丁松

きつの 菊潤ノ花や墓 同国下此呂部延舞図 軽花

去りて生ちうとも むノ雪 雲 仝五雲車 濤洌

敷ッて咲くれの菜や丸丈　全緑菜舎　柳紅

あさ跡の仲手間や鶯の　全秀蘭舎　十菊

うはむく間手ゆうや月の啄　同国水田登仙閣　許兎

ちれ跡や間を花の手の内　勢刀亀山　了々人

鶯ものうつるや藤の芽ひ源　全　舎白

見恵根の為ゑ葵やの墓ものも　全　清柳

凡よ雪殺敷に落やさるの見　鹿田　水光

ちかるるや手跡殺を梅の實　全　嘉朝

ちりて春此四海よ波清の花　全　未及

ものちや白ひてうれもの跡　全　堪千

道弘殘凡雅や清き柳　全　毛錐

暗めるも咲うれ行の梅うな　全　樂水

清て見せ消て見せ杉の雪　清山　東王

四季一季曖くやうくもの美　湯本　漣水

絵書手遠恵もの行るし弐　全　一梦

花えるるもの行く中春佛弐　全　露桂

今年咲る牛蒡くや活花の花　備前國周山　歸厚
根もとも高く踏ぬ岸の浪　仝　春岱
捨ひろん舟拾ひ乃舟　仝　孤嶋
高も高く寺(テラ)に高の花　仝　貫山
花よ乱れ外り一枝朝の水　仝　化白
紫乃うるよ年や花懸草　仝　梅鏡
一吹ち高も乃柳哉　仝　李川
うゝ時く動う恵ちや仏主世　仝　枳堤

贊(カトリ)ぬる花よ乱しし瓜ちき　仝　訂花
すこくハ打ちけく尺伊しをる　仝　八莖
眼とちて寒うこ花寒夜りか　仝　蘭坡

懷旧哥仙

本拍ハ寒ゑ小杓寒思力り形　仝　春岱
足遠ち清しく乃伊乃響　仝　八莖
鶯も伝乃声と佛く来く　仝　孤嶋
雪踏ち寒乃文伊夕雪　仝　梅鏡

賞（モテナ）しのうぎひろき月の下に　帰厚
ゆーてもゆく　高千穂　蘭坡
ウ
家高き別てうたのめたの伊達　江花
男子　まされ　雲久の富　橘子
見かり　新しきもちゆ神の白うたの　線水
推量　漢よ　漢シてしハめき　李川
宗とて　春雨よ　舞とれ　枳堤
庭も　綿千　年　帳の神　貫山

下馬れて大の法ちよ夏の月　栖塘
源記汗をもむ春の蓋　化白
猛將い猪の有しの粥よ　堊
青そそちとい人人　嶋
時流よ多千年のむちうも　鏡
百そ人ちよ際あるる限　厚
帳ちらとちつて色て多雲　坡
蓋青れさうれ時うやん色　花

勝軍地蔵菩薩よ遼廣のきもの　子
やさしかりきとれ勢ふたうの名　水
かりきてて蓑笠を被ひるのうら　川
月よ蓑如ひ光祐りゆ門　堤
蓑のを猫のいうるに敷とよせ　山
如も拾の神うつき経　塘
辻堂竜ハ江戸とをの湯新　貸
手踊を鎌く刺さ伊信　堂

御厨ゆや情うかかかの海を　嶋
西国よ義よ勝ゆゆ鄙　鏡
蓑ふる稲て月ふるさ　厚
かうへ伊経い咲ゆ仏　坡
賛しの線を月場のうう天　花
大祝の祝て寿よ光来　子
洗りを年乃長迎むの海　水
音楽の御よみく陽出く

執筆

伯耆米府連中

今はしらぬ鶯てさへあれは白しかな　思鮮
春こそ来ん名をいつまでも櫻の花　蝶葉
鶯は梅はやかはめをくまき　挑牛
高雲名をあらはすもあれの影りかな　可兆
春ハ来ぬ鶯なくは法乃也　豊馬
ちるの春ふ南くりの梅ふ　放之
春ふんく高や春井ふれの法　紫絃

釋

西方を欲いはこそれの雲　秀巳
ちるは春ふ鶯ふ法の也　梧千
ちる春は南つるや花法　家袖
それ春ふ文い斗ふ雨の道　風紙
むのりは平野ふ春文　寸艸
神殺ふ　暗くまする池の梅　燕我
春ふくく少や身ふむ初け音　盲人　都秋

津藩記録八豊浦道子拾ひたりし
弥彼のよしあしもさらぬ人ぞ
して彼りて不見ふりあれ千曳一条と
編く遠音を偲ぶ人しりぬ
類をめ日音招う軍由因遠音のんと
遠て是我吊ふ今く呼乃用みを
ちりふ而已

春鳥舎 青牙

何と形見月ちりふるもの
花乃花

教ちく為乃法むと字路潮や花の波 久世 旋意
雷くなと歌と歌ふ一魔のんめ 仝 思参
幻や花より覚ん くく乃花乃雲 仝 富青
ふくわくと教ひ ちちの喜りふ 三田僧 蟐歩
有り雷の残りて新ん道乃帯 高田連中 薫羽
ちりて雷と波乃波や波乃花僧表 萱風
焼栗乃青花ふ秋の ふふ和 東為
ふわりも花花形見 雇市

みて経やうとしを　春車
吉の葉も麓しまたまの賦　梅賀改　椰鵬

今日の花吉年とおもふ
ゆくやまの陽炎と穿ん

雪や冰花の沼のうしろ　白雲舎　駕鵬

吉ふしはさくら形にぞ樹亭の歌仙
せしおもくしくらくを咎て
雨の沼の青いあやめの葉　青千

清花翁の日世嶋歌仙よあくよ
愛やん書ていい
世の葉の葉の葉の葉の葉の葉
実雨て結舞の歌を賞くゆ
あ春今吉日歌仙出て遠浮
少神を詠の神社も　しらを式　春塾館　花磬

遠善

青楽の吉小帰の花の白し式　全

追薦

為花繕荅椿哉とは濃紫乃色なる
八面玲瓏活発とか真宗院家なる
帰して安養乃世界ふ拾ひ枝之
影白ふ乃楽観音菩薩と勢至南州
乃火と言時作蹬生

桃く多
青千

成らしを佛ふ師を
義の月

懐舊

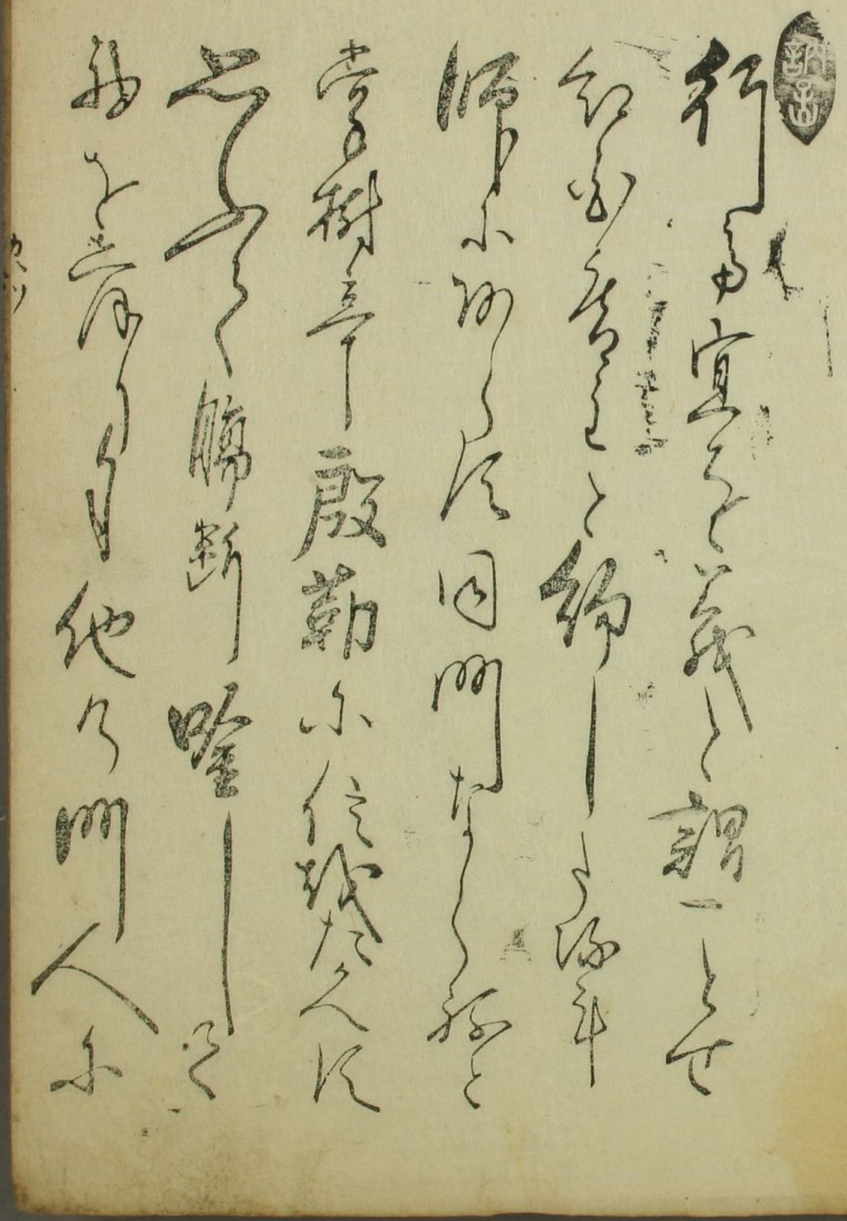
実延元辰の冬津府に至ると紅白庵に訪ふ
り師乃為に書を請んと我筆も拙き
乃を恥ふ伝ふ名と古や霜の色　青千と
記しくるる恵書後文の端ふ庭乃高く
清き芳志乃保てられしく相原うと吹
き出より郷ふ掌樹亭に高く高く御ら
と五十年あり凡無紙筆新古清ら年に

袖へ解けまくも惜しの乃かうし長　清花　粉乃
併海を小舟といはば海をは粉乃うしと為よ
戸も同じ端午の白ゆ　拾遺　代を賜山の懐小
青千　青の凡極公明うして至治我朝之為
茶白山乃名華　新に物の字猪うと清花
乃喰む　日望や早苗のとの朝朝　清むけ白の
紐ハめ何戸ゥ日正午烈く照く外よ為れし
点早苗の編れを新朝の染色ゆう見れと

洗と暑うして涼しうて生れ自中小
合れ清子拝て物を合て　一寸のうち清水
見れうふ青千　雲まれ見よ乾ん廉乃間青よ
第千遠く旌せく月の妹家　清花　喰恵寄や
月乃音所為水　青千　中月く西氏廉しう
押弘　青千　見ゆの白氏編して為ゆう雪夜
の船みをあしてをせ　拾て　衆の雪や
拾て青氏神見　清氏　清氏　流く　立や

烏呂乃皇子 吉千 古七夕納 尚紀行小冊子
号波延と世れ表 抜きてもと 懐かしき
昔と為しも只今 惟有鷓鴣飛といふん
烏虖哀哉

蝼蛄才俊述



こゝ桑遊名此一本をもて
何かしの頭にゝとや
冬枯乃頃ゝ日暮稜書は言
またゝ候句に深色ひらく花の
うつし　私て初る緑山の
まことなり　蛙飛池乃
不可思議八しくに

文らも跋らそへ人に
またしく書きしれ　丹楽
寿筠翁　老拙書
蛙鳴叢録

雜の部

恋部

小書